たとえばこんな物語。その壱。

おめが

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
たとえばこんな物語。その壱。

【Ｎコード】
Ｎ９０１１Ｉ

【作者名】
おめが

【あらすじ】
冬が始まる。

俺は冬が嫌いだ。
というか怖い、といった方が正しいかもしれない。
あんなことがあれば当然なのかもしれないけれど。

はじまり。（前書き）

はじめまして。おめがと申します。高校一年生、男です。
初めて小説を書かせていただきました。
先につなげるためにも、厳しい評価をしていただけると嬉しいです。

よろしくお願いします。

はじまり。

「っ！」
あわてて飛び起きる。

「…」

時間はすでに8時を過ぎている。
もうここまで過ぎてしまっていると、遅刻したくないという感情もなくなる。

「…やれやれ」

今日は月曜日。週の始まりの日なのに、早々寝坊してしまった。
本を読んでいてそのまま目覚ましもセットしないで寝てしまったらしい。

一階に行くと母親がお茶をすすっていた。

「今日は遅いのねぇ。学校、お休みなの？」
「…んいや。寝坊」
「あら、珍しいのねぇ…起こさなくてごめんなさい。」
「いや、俺が悪いからね。」
「そう？いつも一人でちゃんと起きるからてっきり休みなのかと思って」

「…あのさ、」
「なぁに？」
「…いや。なんでもない。飯食って行く」
「…そう。ゆっくり行くの？」
「こんな時間に起きたら絶対遅刻だし、もういいやと思って」
「そう。でもあんまり遅くなったらだめよ？」
「ん」

そのまま母親はリビングを出ていく。洗濯物でも干しに行ったのだろう。

俺はとっとと朝食を済ませて、準備を手短にして家を出た。

俺は逢坂達也（あいさかたつや）。高校一年生。男だ。
成績普通、運動神経普通、趣味は散歩とピアノ弾くこと、彼女いない歴１６年。

普通だ。いたって普通。
これ以外に言うことがないくらいに普通だ。

今は１２月に入ってかなり寒くなってきた時期。
通学路のイチョウ並木もほとんど葉が落ちて寂しさを感じさせている。

息を吐くと、白い。

今年も、冬が来たんだと思う。

—冬が。

はじまり。（後書き）

拙劣な文章ですいません。
評価、感想をよろしくお願いします。
続きは、出来次第投稿します。

はじまり2（前書き）

短く少しずつ投稿して行こうと思います。よろしくお願いします。

はじまり2

―はじまり2―

「逢坂、遅刻か？」
「はい、すんません」
教室のドアを開けると、2時間目、古典の授業だった。
「席につけぇい」

先生に謝り、自分の席に着く。
窓際、一番後ろ。席替えのクジで勝ち取った。

教材を出したものの、やる気が出ない。

黒板には、
―12月11日。

その数字を見るだけで、もう何もかもが嫌だった。

その時、チャイムが鳴った。
2時間目、終了だ。

「逢坂？どうしたんだぁ？」
「ん？なにが？」

話しかけてきたのは藤沢（ふじさわ）だった。
藤沢融（ふじさわとおる）。中学からよくつるんでいるやつだ。

「遅刻なんて珍しいじゃんか？」
「あぁ、寝坊したんだよ」
「寝坊！？お前が！」
「なんで？別に寝坊なんて誰だってするだろう？」
「いや…だってお前皆勤じゃねえかよ。寝坊で遅刻なんて、珍しいどころか始めてじゃん。」
「え？…あぁ…」

言われて気付いた。高校に入学してから1度も休んでいなかったのだ。

「そっか、俺高校は皆勤だったんだ…」
「それどころかお前、中1の2学期から1回も休んでねえよ」
「そうだったっけ？」
「おいおい、なんで俺が知っててお前が知らないんだよ」
「いや…いちいちそんなの覚えてねえし」
「ふつう覚えてると思うんだが…」
「そうか？よくわからん」
「…」
「なんだよ」
「…12月だな」
「っ…」
「あ、わり。なんか、遅刻してくなんてホントめずらしいから…その…3年前のことが…」
「…ホントにただの寝坊だから」
「そうか…悪かったな、なんか購買で買ってくるよ」
「あぁ」

藤沢は俺から逃げるように教室から出ていく。

藤沢とは中1からずっと同じクラスで、席替えでたまたま席が前後になって仲良くなった。それ以来、基本的に行動は二人でするようになった。たまに空気を読まないところがあるけど、気の合ういい奴だ。

3年前…か。

休み時間の喧騒すら耳に入らなくなる。

あの日のことが、頭にフラッシュバックする。

…

はじまり2（後書き）

短いんですけど、今後の展開をたのしみにしていただけると嬉しいです。

三年前の話。（前書き）

何というか、自分でも書いていてよく分からない話になってきてしまいましたが…。

すこしだけショッキングな内容です。そこまでリアルな表現はしていませんが、苦手という方は飛ばして下さい。

まだまだ、拙劣な文章ですが、お付き合いいただけると幸いです。

三年前の話。

―3年前。

…3年前のちょうど今日。
今日は親父の三回忌だ。

あの日、俺はいつも通りの時間に帰宅した。
親父は家で仕事をすることが多く、その日も朝から家でパソコンを使っての仕事をしていたんだと思う。

朝、家を出るときは自分の部屋にこもっていた。

「ただいまぁー」

…返事がない。母親は買い物にでも行っているのか、玄関に靴がなかった。

家の中はいつもと変わらないし、何の違和感もなかった。
ただ、親父がいるハズなのに、なんとなく人の気配というものが感じられなかった。

きっと仕事に夢中になっているんだと思った。

そのまま二階の部屋に上がって、たまには気を利かせて親父に何か

食べ物でも持って行ってやろうと思った。
本当に気まぐれだ。

「おーい、飲み物とお菓子！持ってきたよ！」

……親父の部屋の前で大声で読んでも返事がない。

「なぁ？親父？…」

ぎぃっと親父の部屋のドアを開ける。

「っ…お、やじ…？」

そこには親父が倒れてた。

血まみれ。
親父を中心に血だまりが広がっていた。

「…っ！！！？」

そのままその場にへたり込んだ。
お菓子と飲み物が乗ったお盆もそのまま落とした。

グラスが割れて入れてあった麦茶が広がる。
そして、親父の血であろう血だまりと混ざった…

目の前の光景が信じられなかった。

親父はピクリとも動かないし、どうしていいのかもわからなかった。

そのとき、

「ただいまぁ～」

母親の声だった。

大声で叫び返そうと思ったけど、声なんか出なかった。

その時の俺は中学一年生で、まだ心が幼かったのもあるかもしれないけど…

いや、誰だって親父が血まみれで倒れてたら声なんて出ないはずだ。

「達也？いるんでしょう？」

廊下の端に母親が現れる。

「…かっ！母さん！？」

「達也？何してるのよ？」

母親の位置からだと部屋の中が見えないのだ。

「なぁに？父さんが何かしたの？」

母親がゆっくり歩いてくる。

「…っ！？」

「…母さん…これ…」

「…！！！？」

母さんは何も言わずに走って行って急いでどこかに電話をかけていた。

俺はそのまま病院で目覚めるまでの記憶がない。

部屋の前で倒れていたらしい。

親父は3年前に死んだ。

殺された。

……

三年前の話。（後書き）

ここまで読んで下さりありがとうございます。

なんという展開ですかね。
自分でもどうかと思います。

でも、これがこの小説の一番大きなポイントになってきます。

まだ続きますが、もう少しで終わります。

たぶん、あと二話くらいです。

よろしくお付き合い願います。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9011i/

たとえばこんな物語。その壱。

2011年10月6日08時06分発行